

造形教育における壁面構成製作の実践

— 2メートル四方面程度の壁面を活用して—

櫻井 晋 伍*

要旨 本稿では、こどもコース1年次生を対象として、本学附属研究所内の保育・幼児教育ルームの壁面構成製作を行った成果について報告する。

将来、こどもコースの学生が保育現場に就職した際には、他の保育者と協働して壁面構成の製作及び装飾を行うことになる。そのため、本教育実践では、2メートル四方面程度の壁面を活用した作品をグループで製作させることによって、実践的な力量形成を図る教育実践を行った。

授業実施後に、アイデアスケッチ・壁面構成作品及びレポートの記述内容を検証した結果、学生は、大画面における構図の取扱いの難しさについて体験的に理解を深めていたことが分かった。また、製作した動物等のモチーフについて、動静等の動きを表現出来るようにするための指導の必要性が明確になった。これらの課題解決のためには、製作前に参考となる作品の鑑賞教育を行い、学生の構成力及びモチーフの表現力育成に結び付ける必要があると分かった。

キーワード 造形教育 壁面構成 保育者養成 協働製作

1. はじめに

幼稚園や保育所では、園児が行事の題材に興味を持ったり、季節感を感じ取ったりすることが出来るように、様々な壁面構成が飾ってある。保育室内のように、子どもが一日の大半を過ごす部屋は勿論のこと、玄関や廊下、お遊戯室といった共有スペースにも、大小様々な壁面構成が飾られている。使用されている造形材料

も多様であり、色画用紙や折り紙、スズランテープ等の人工的な素材が用いられている場合もあれば、落ち葉や木の枝、どんぐりといった自然物を用いて仕上げられていることもある。また、描画材料も、ポスターカラーやアクリル絵具、クレヨン、マーカー等が使い分けられている。このように、壁面構成では、製作する際に用いる造形材料の違いはあるにせよ、園内の壁面スペースを有効に活用して作品を飾り付

* 福岡県立大学人間社会学部・講師

け、子どもの視覚に訴えかける演出が試みられているという点においては、保育者の製作目的は共通している。

保育室内と比較して、園内の共有スペースにおける壁面構成は、そのサイズが大きくなる傾向がある。特に、生活発表会における壁面構成のサイズは、舞台一面を飾る必要があるため、大きな作品を仕上げるのが求められる。また、演目に合わせて舞台上の壁面構成作品を差し換えていくこともある。このように、特に大きなサイズの壁面構成を製作する場合は、保育者同士が協働で製作に取り組むこととなる。つまり、壁面構成は日常の保育だけでなく、行事の際においても、保育現場には欠かせない造形作品として位置付けられていると言えよう。

このような現状を踏まえると、保育者養成課程在学時の段階で、グループワークを通じた大画面の壁面構成の製作を体験しておくことは教育上有用である。特に、構図や色彩等の美術的な技能指導を受けることと共に、製作過程における意見交換や役割分担を踏まえて協働製作するという経験は、保育者になるにあたって必要不可欠であると言える。

例年、こどもコースを選択する学生は、高等学校在学時に美術科の授業を受けていない学生が約8割を占めている。そのため、1年次前期開講科目の「造形Ⅰ」では、保育現場で子どもたちが用いている造形材料に触れながら、それらの特性を学ぶため、個別での製作に組み込んでいる。その学習を踏まえ、1年次後期開講科目の「造形Ⅱ」では、グループでの製作活動を行うことで、より保育現場で必要とされる技能が身に付くような授業内容へ展開させている。

本教育実践では、学生たちを4～5名のグループに分け、本学附属研究所内の保育・幼児

教育ルームの大きな壁面を活用した壁面構成の製作に取り組ませることとした。前期の「造形Ⅰ」における作品は八つ切り画用紙のサイズであったが、後期の「造形Ⅱ」で製作する壁面構成作品は、それよりもはるかに大きく、縦横2メートル程度の大作となる。作品のサイズが大きくなるに伴い、一つひとつのパーツのサイズも大きくなる。それに加え、協働で一つの作品を完成させるためには、製作工程における役割分担や、完成イメージの共有を図る必要がある。さらに、作品を飾った際を想定した構成バランスの検討と共に、装飾スペースの空間をレイアウトすることへの意識も必要となる。本稿では、それらの技能向上に資する機会を提供したことによる成果や今後の課題について報告を行う。

2. 研究の目的

本稿に関連する先行研究としては、大塚(2016)が、壁面構成製作のグループワークを通して、協働学習の効果や課題について検証した実践研究がある。大塚は、その実践の結果として、グループのメンバー全員に主体的な取り組みが生じたことを報告している。また、筆者(2017)は、保育者養成課程在学生の壁面構成の製作技能向上のために、日本画の構図と色彩に着目した鑑賞教育を行った。この研究では、鑑賞教育前後における作品と省察のレポートを通して、比較考察をしたところ、構図に関しては、鑑賞前は個々のパーツに意識が向いていたが、鑑賞後には、作品の全体像を意識して製作に取り組んだ学生が増加していた。また、色彩に関しては、鑑賞前は単調な色彩表現となる学生が多かったが、日本画を鑑賞した後は、同

色系の中で複数の色調を用いるなど、多彩な色彩表現を用いる学生が増加傾向を示した。

以上のように、壁面構成の製作に関連する実践研究はあるものの、未だその数は少ない。また、学生が八つ切り画用紙等を用いた個別製作から、壁面全体を飾り付けるグループワーク製作に切り替わる中での、製作事前事後のレポートについて比較考察を行った研究は管見の限り見つからなかった。

そこで、本稿では、グループで製作するために描いたアイデアスケッチと、それを基に製作した完成作品を用いて考察を行う。また、製作事前事後のレポートの記述内容を分類して集計し、比較考察を行うことで、学生の課題を抽出する。そして、その解決を図るための教育内容について検討する。

3. 研究の方法

3-1. 対象

令和3年度後期開講科目「造形Ⅱ」履修者14名。

3-2. 実施期間

令和3年10月下旬から令和3年12月上旬に渡り、計5回の授業において実施した。

3-3. 授業内容

(1回目)

造形実習室で、本時のねらいであるグループワークを通した壁面構成製作と、装飾の実践の意義について講義を行った。今回の壁面構成のテーマは、季節や行事が限定されたものではなく、1年間を通して長期的に装飾出来る内容を設定するように伝えた。また、大画面での製作

にあたって、構成バランスを検討することの必要性について指導した。その後、保育・幼児教育ルームに移動し、4～5名の3グループに分かれ、装飾する壁面をグループ毎に選ばせようとして、割り当てられたサイズをメジャーで計測させた。そして、製作する作品のイメージ共有と製作工程の検討のために、グループ毎にアイデアスケッチの製作を行わせた。その際、既成のイメージを安易に流用するのではなく、オリジナリティーを重視して製作するように指導を行った。

さらに、授業後半には、10分程度で、前期までの製作を踏まえ、今回の製作で工夫をしたい点や、グループ製作での留意点、広い壁面を使って製作するうえで考慮すべき点についてレポート記述を求め、授業終了時に回収した。

(2回～4回目)

造形実習室で、壁面構成の製作を行わせた。限られた授業時間の中で完成させるために、役割分担と時間配分を検討したうえで製作するように指導を行った。学生が使用した造形材料は、主に色画用紙と折り紙であり、切り紙と同様の手法で製作を行わせた。

(5回目)

完成した壁面構成を保育・幼児教育ルームに持参し、装飾を行わせた。その際に、構図の見やすさが損なわれないように、全体像と個々のパーツの配置のバランスに留意して装飾するように助言した。また、装飾をした後には、グループ毎に壁面構成のテーマと製作時に工夫した点について紹介させた。

最後に、製作後の省察レポートの記述を求め、授業終了時に回収した。

3-4. 検討内容

本稿では、以下の3点について取り上げる。

- ①アイデアスケッチと完成作品を通して、学生による製作時の工夫と技能上の課題について考察を行う。
- ②製作事前事後におけるレポートの記述内容を通して考察を行う。特に、大画面の製作で求められる技能や協働の必要性について、学生の気付きを基に捉える。
- ③上記を踏まえ、壁面構成製作における学生の課題を明らかにし、その解決の方途を探る。

3-5. 倫理的配慮

令和3年度後期の成績評定開示後の令和4年5月に、学生に対して研究協力同意書及び同意撤回書を提示し、研究協力の依頼を行った。その際には、筆者以外の本学専任教員より依頼をすることで、学生による任意の研究協力となるように配慮した。そして、同意が得られた学生のデータのみ用いて本稿の執筆に着手した。

4. 結果及び考察

4-1. アイデアスケッチ

まず、グループ毎に製作内容のイメージ共有のために、アイデアスケッチを描かせた。作品タイトルは学生が名付けたものであり、「赤ずきんちゃん」「ハッピーウエディング」「レインボーワールド」である。以下、グループで描いたアイデアスケッチの作品3点を写真で示す。

「赤ずきんちゃん」(写真1)を製作したグループは、赤ずきんの物語をテーマとして取り上げ、そのストーリーの全体像を壁面構成で表現することを試みていた。赤ずきんが歩く道中には、木の陰から狼が隠れて見ており、その道

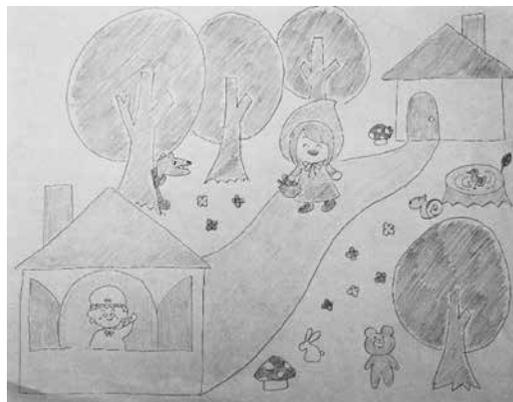


写真1 赤ずきんちゃん

の先にはお婆さんの家がある。このように、ストーリー性を描くと共に、鳥やリス、兎などの動物を周囲にあしらうことで、子どもたちが作品に目を止める要素を追加していたことが見て取れた。



写真2 ハッピーウエディング

「ハッピーウエディング」(写真2)のアイデアスケッチでは、メインとなるお城を中央に描き、人物を2名と、鳥・兎・象・熊・狐・蛇をあしらっていた。特徴的なことは、メインとなるお城や人物をシンメトリーに位置付けたことで、構成的に力強い印象に見えるよう工夫していたことである。また、草むらから蛇が出てくるように配置したり、熊が寝ている様子を描い

たりすることで、モチーフに動きや表情を持たせており、作品が単調な印象にならないように工夫を施していたことも見て取れた。

「レインボーワールド」(写真3)のアイデアスケッチを製作したグループは、2つの壁面に渡って装飾をすることにしたため、鑑賞者の視線が左右に流れるようにモチーフを位置付けていた。また、壁面には、既にホワイトボードが設置されていることを踏まえ、斜めに虹をあしらっており、装飾できる壁面の形状を踏まえてモチーフを位置付けたことが見て取れた。さらに、壁の長さのメモを取っており、どの程度のサイズで製作するか具体性を持って検討していたことが分かった。

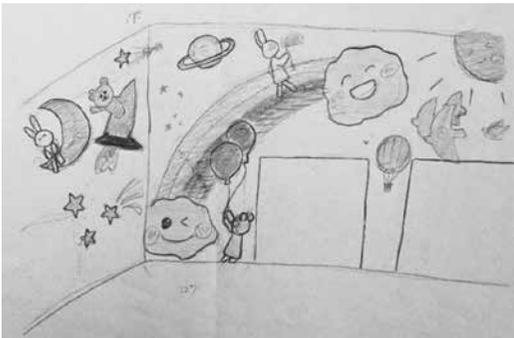


写真3 レインボーワールド

4-2. 完成作品

「赤ずきんちゃん」(写真4)の完成作品について、アイデアスケッチと比較して分かることは、完成作品の方が、木や家のサイズが小さめになっていることである。このグループは、1枚の色画用紙で切り出せるサイズで個々のモチーフを製作したため、構成の大小関係としては、全体的に小さく作る事となった。アイデアスケッチと比較すると、構成バランスは、ややまとまりに欠けることが見て取れた。また、アイデアスケッチの配色では、家の屋根は青と



写真4 赤ずきんちゃん

紫、木は緑と青緑の2色を用いていたが、壁面構成作品では家の屋根は紺1色、木は緑1色で製作しており、単調な色調になったことも課題として挙げられよう。一方で、左下のお婆さんの家の窓は、開閉できるように工夫が施されていた。窓を開けると、お婆さんの顔が表れる仕掛けとなっており、個々のモチーフにおいて工夫をしていたことが見て取れた。また、道に沿って黄・紫・橙・ピンクの4色の花をあしらうことで、配色をカラフルにすると共に、構成の流れが見やすくなるように工夫をしていた。そして、空に雲を追加することで、構成のバランスが保たれるようにしていたことも分かった。

製作後のレポートでは、「子どもたちが遊べるように、家の窓を開閉できるようにした。」「お婆さんの家の窓の仕掛けは、自分一人では思い付かなかったので、グループ製作をした成果だと思う。」と記されており、製作時に意見交換をしたことは、作品の展開に影響を及ぼしていたと分かった。

「ハッピーウエディング」(写真5)を製作したグループは、入念に描いたアイデアスケッチを基にして、モチーフのサイズ等を計画的に実



写真5 ハッピーウエディング

寸大に合わせながら製作していたことが見て取れた。お城の壁は白画用紙を用いており、屋根は水色、ドアは紺色の色画用紙を使用していた。これらを製作する際は、壁面のサイズに合わせて八つ切り画用紙を張り合わせて大きなサイズにしていた。このように、スケール感を重視する壁面構成の場合は、製作者間でアイデアスケッチによるイメージの共有を図ると共に、製作工程における造形材料の取り扱いの工夫を行うことで、当初と完成作品のイメージが合致するように進める必要がある。このグループは、それを意識的に行っていた。製作後のレポートには、「毎時、意見交換を行った。」「お城を作るグループと人物を作るグループに分かれたことで、効率よく製作出来た。」「細かい所まで1つ1つ話し合って、メンバーの意見を取り入れて作ることが出来た。」等と記されており、役割分担をしたうえで、協働して壁面構成を完成させたことが読み取れた。

「レインボーワールド」(写真6)を製作したグループは、アイデアスケッチを踏まえ、個々のモチーフの色彩表現に工夫を施していたことが分かった。アイデアスケッチと異なる部分としては、熊には白い宇宙服を着せており、ロ



写真6 レインボーワールド

ケットは、紺・紫・青・黄・赤・橙という6色を用いてコントラストを付けることで、カラフルで目立つようにしていた。レポートでは、「熊の服は、宇宙飛行士の服とすぐにわかるようにデザインした。」「熊の目にハイライトを入れて可愛くなるようにした。」等と記述しており、部分的なデザインに工夫を凝らしたことが読み取れた。また、兎にはマスクを付けさせており、コロナ禍の状況を反映させた製作上の展開も行っていった。その他、レポートには「動物や星たちの表情を工夫した。」とも記されており、モチーフの印象が多彩になるように工夫を施していた。

改善点としては、兎と豚は正面を向いた状態になっているが、アイデアスケッチでは横向きに描いてあった。個々のモチーフを目立たせたい場合は正面を向いている状態でも良いが、全体像の中での動静や、変化に富む様子を演出する場合は、モチーフの向きにバリエーションを持たせたほうが望ましいため、この部分については今後の課題と考えられる。

4-3. レポート内容の分類及び集計

記述内容を整理した結果、「構図」「色彩」「形・大小関係」「意見交換」「役割分担」「技能」の6つのカテゴリーに分類することが出来た。

学生のレポートには、同じカテゴリーに関する記述を複数の文章に渡って記しているケースがあった。この場合、文脈が異なる際はカウントを加算して集計をすることとした。また、一文の中に、複数のカテゴリーにまたがった記述が見られた場合は、それぞれのカテゴリー毎にカウントした。その他、文脈が読み取りづらい記述も見られたが、その際は慎重に文意を汲み取ることに留意して集計を行った。

以下の図1・図2に、その集計結果を示す。

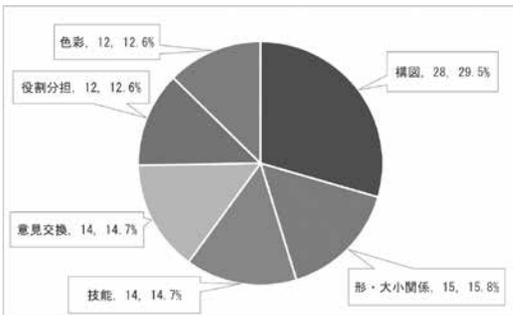


図1 作品製作前における記述内容のカテゴリー別集計結果

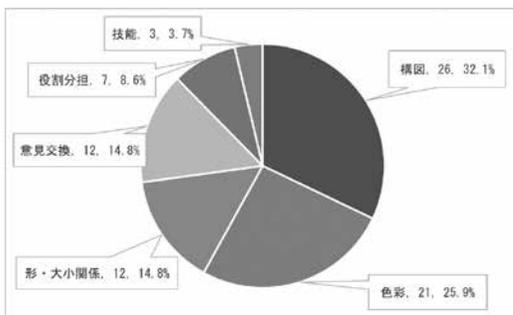


図2 作品製作後における記述内容のカテゴリー別集計結果

作品製作前の記述内容をカテゴリー別に集計したところ、「構図」は28回 (29.5%)、「形・大小関係」については15回 (15.8%)、「技能」及び「意見交換」に関しては14回 (14.7%)、「役割分担」及び「色彩」に関しては12回 (12.6%)

の記述が見られた。

それに対して、作品製作後の記述は「構図」が26回 (32.1%)、「色彩」は21回 (25.9%)、「形・大小関係」及び「意見交換」は12回 (14.8%)、「役割分担」は7回 (8.6%)、「技能」は3回 (3.7%) という結果であった。

「構図」に関しては、製作前後共に、最も記述数が多かった。本教育実践は、学生にとって初めての大大画面での製作であったため、1回目の授業時に、構図のバランスが取りづらくなることを念頭に置いて製作するように助言した。その結果、製作前の学生のレポートには、「壁を広く使いながらも、隙間を作らないようにすることで、全体が見やすくなるような構図にしたい。」「画用紙より大きな作品を作ることは初めてであるため、普段よりさらに全体のバランスを見ながら構成を考えたい。」といった記述が見られた。一方、製作後のレポートには、「出来るだけ壁面のサイズを意識して製作したが、実際に飾ってみると小さく感じたり、バランスよく位置付けるイメージが掴めなかったりしたため、構図はとても難しいと感じた。」と記していた。これらの記述から、学生は大大画面における「構図」の難しさを感じていたことが窺えた。この気付きは、理論上の理解だけでは体得出来ることではなく、実際に作品を製作し、飾り付けたうえで客観的に鑑賞することによって初めて身に付けることが出来る造形的な技能である。壁面構成に限らず、絵画やデザインなどの製作においても、画面の大きさは「構図」の取扱いの困難さに直結する。また、保育現場に就職すると、子どもの作品を飾り付けることもあるため、養成課程在学時の段階で構成力を育成しておくことは必須である。本教育実践は、作品を製作後に飾り付けることによって、初めて作品が完

成するという意識付けや、壁面におけるレイアウトによって作品の見栄えが大きく変わることについて理解を深める契機となったことが示唆された。

また、「出来るだけ余白が無いように工夫した。」「出来るだけ余白を作らないようにバランスよく飾り付けた。」といった記述も見られた。ここからは、学生は、余白に対してどのように対処をするか考え、出来るだけ不必要な余白が生まれないように構成を行ったことが読み取れた。しかし、より効果的な構成を行うためには、飾り付ける予定だった装飾物を取捨選択する吟味や、花や雲のような、同様のモチーフを複数飾り付ける場合には、密集させる部分と余白を空けておく部分を意図的に作るなど、構成のレパートリーを身に付けておくことが必要となる。この課題を解決するためには、製作前に、参考になる作品の鑑賞教育を通して、構成には多彩なバリエーションがあることへの理解を深める必要があると考えられる。また、とかく学生の作品は、部分的には丁寧に作られているものの、全体像を意識して作ることに対する意識は弱くなる傾向が見受けられる。この点に関しては、「後になって余白や配色の偏りが気になったため、最初のアイデアスケッチでは、装飾の時を想定して、出来る限り細かく正確に描いた方が良いと気付いた。」という省察も得られていた。このように、本教育実践を通して、構成と計画的な製作の重要性に自ら気付いた学生もいた。

次に、製作に用いる道具の取扱いや、作品に細工を施したりする「技能」に関しては、製作後において、最も記述数が少ないカテゴリとなった。その記述数は3回に留まっており、学生は自身の「技能」よりも「形・大小関係」等

の別のカテゴリの方を、より重視している傾向があると読み取れた。

また、「形・大小関係」に関しては、製作前は「細々とした作品ではなく、見る人の目を引く大きめのサイズで作りたい。」「遠くから見ても何を作っているか分かるように、見やすい大ききで作る。」等と記されており、作品のスケール感に関する記述が多く見られた。一方で製作後は、「目立たせたいところを大きくして、他の部分を小さめにしてバランスを取った。」「大きな作品のため、大小のバランスが崩れやすかった。」のように、作品の中での具体的な大小関係に言及した省察が記されていた。ここからは、製作前の段階から、全体像のスケール感と共に、個々のモチーフの大小関係を意識してイメージ形成を行う必要性について指導が必要であると分かった。

「役割分担」及び「意見交換」については、グループ製作ならではの気付きが記されていた。製作前は、「グループで分担して効率よく仕上げる必要がある。」「一つのアイデアに固執せずに、柔軟に案を出し合うことが大切だと思う。」といった留意点が記されていた。また、製作後は、「誰がどの作業をするか明確に分担して取り組むことが出来た。」「アイデアが絞り込めないところもあったが、配色まできちんと決めてから製作したことが成果に繋がったと思う。」といった省察が見られた。ここからは、計画の重要性と共に、グループの一員として協働する際の留意点について、各自が意識して製作していたことが読み取れた。本教育実践は、学生にとって個別製作からグループ製作に移る初の経験であったが、製作事前事後共に、学生はグループのメンバーに配慮して製作を進めていた様子が読み取れた。

「色彩」に関しては、製作前よりも製作後の方が、記述数が増加していた。この部分も含め、製作前後における個々のカテゴリーの記述数の変化を可視化するために、集計結果を棒グラフで示すこととする（図3）。

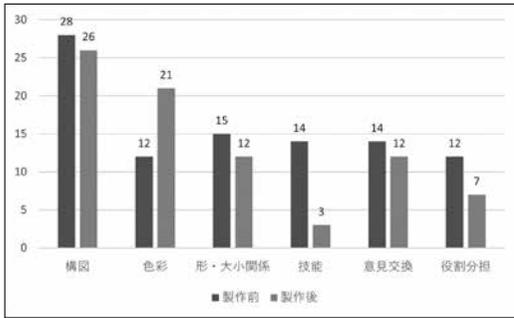


図3 作品製作前後のカテゴリー別集計結果

図3から見て取れることは、「色彩」は製作後の方が記述数は多いものの、それ以外のカテゴリーの記述数は減少していたことである。

「色彩」に関連する製作後の省察としては、「主となるキャラクターの色をはっきりさせて、目立つようにした。」「全体的に色合いが地味になったため、お花をたくさん作ってカラフルにした。」「金・銀の折り紙を使って華やかになるように工夫した。」といった記述が見られた。今回の壁面製作においては、主に色画用紙や折り紙等、既に着色された造形材料を用いたことにより、「色彩」の選択肢は狭くなった。そのため、学生は限られた選択肢の中で、全体と細部の製作において、出来るだけカラフルで楽しいイメージになるように配色の工夫を凝らしていたことが読み取れた。製作工程が進むにしたがって、全体像としての「構図」を重視しながらも、各モチーフの部分的な「色彩」の表現にも工夫を施す傾向が強まっていたことから、学生は、作品の全体像が見えた後の製作後半において、「色彩」の表現を具体的に再検討するこ

とで、作品の完成度を高めることに繋げていたと考えられる。

5. まとめ

本教育実践では、保育・幼児教育ルームの壁面構成製作と、その空間を有効に活用することを意図した装飾に取り組みさせた。その結果、学生は、壁面構成において特に重要となる「構図」に関する気付きを得ていた。

学生の省察には、製作した作品を装飾する際、余白によって全体像の印象が変化することや、構成バランスの難しさに関する課題意識を持ったことが記されていた。作品は、製作後に飾り付けることで初めて完成するため、その意識付けにおいても本教育実践は有効であったと考えられる。また、保育者になった後は、子どもの作品を飾り付ける立場になるが、保育者のレイアウトの力量によって子どもの作品の見栄えが大きく異なってくる。そのため、保育者養成課程在学時に、構成力育成に資する指導の充実が肝要であるということが本研究成果から明らかになった。

今後は、「構図」に関する指導の必要性を踏まえ、装飾する際は、飾り付ける予定だった装飾物を取捨選択するという吟味も必要になるとことや、花や雲等の同様のモチーフを複数飾り付ける場合は、密集させる部分と余白を空けておく部分を意図的に作る等、構成のバリエーションについての指導が必要になると分かった。そのため、今後は製作前の段階で、参考作品の鑑賞教育を通して、「構図」に関するレポーターを具体的に提示することで、学生の「構図」の選択肢を増やす教育内容の検討を行うこととしたい。

また、学生によっては、個々のモチーフを正面に向けた状態で揃えて製作する傾向も見られたため、見栄えが単調になることに繋がっていた作品もあった。この点に関しては、作品に動きが感じられるように、横向きや斜め向きなどのバリエーションを意識することや、人物であれば手足に動きを付けるなどの工夫について、具体的な参考作品を示すことを通して意識付けを行う必要もあると考えられる。

本教育実践を通して、壁面構成における構成力やモチーフの表現力に関する力量形成を図るためには、鑑賞教育と製作実践の往還的な指導をより充実させる必要があると確認出来た。

参考文献

- 1) かすみゆう、小林祐岐『子どもと遊ぶ美しい壁面構成』黎明書房、1992.
- 2) 大塚習平、三上慧「保育者に必要な協働する力の育成－協働学習「壁面制作」を通して－」湘北紀要第37号、pp.53-69、2016.
- 3) 櫻井晋伍「保育者養成課程における鑑賞教育に関する考察－日本画の構図と色彩に着目して－」久留米信愛女学院短期大学幼児教育学科研究紀要〈信愛保育研究〉、pp.11-21、2017.
- 4) 櫻井晋伍「保育者養成課程における壁面構成の制作技能育成に関する考察－鑑賞教育を通じた実践－」大学造形美術教育研究第16号、pp.20-25、2018.